古今
奇談

艾草紙

一

へ 13
961
1

13
961
巻 1

嬉ずの方正先生象が文房を飾む倩小英字の業あるを把て跪ゝ真面を見て是れを世に
送れ侍たしども者ゝ家の志あり此趣旨の
義を厚を感ず面し象國事を著也第ゝ角
答ゝ先生の言是ゝ象ゝ此ゝの為に
作雅子の説る所是ゝ巨処時恒迎
ゝして孫ゝ教とゝる業の物語ハ巨業を設けて
志を足し人情乃ち巨を思ゝ巨を著ゝ業
紙ハ情徴ゝ表ゝ出るゝ此ゝ巨ゝ世を通ゝ
社ゝ先ゝ巨を作ゝ巨の世大道を照ゝ人

之を見て光をいとむ人ハあを文なきむ吟嘉ようん
と云ふる人元を燒醒
して元を醒ハ蛍の国なる地蛍と
言ふ所を礼ぞ眠を生じ易し生ずるの三年
後ハ千里の二人の主ハ余が地
雙イとり刹竹馬ハ鞭を遷さ北し
鈍もりハ苗ろ小形新乃雛ざるがどく長蛙を
余ハ齊き一嚴の民ハ一耕いとなる北ハ西ハ
北闘の時ハ此茅紙を祀して国祀中の茅徒ハ
化るのぞ言とす原とう云山ハ義て後ハ鄙

行の歩ハあるべといへども此ハ義氣の言葉ハ
を出ハ書ようハ常を同て時の政を云り
ろ洗の言葉ハて和ハをさとて風の音ハ秋
乃涂を三翼碪のひゞ知るハの近を思ふ他
あるハ鄙言弟て俗の儒とたを言これとう義
ハ中ぎつ義ハそむ可のてハ東の遠ろう
涂更を岩ろの鮭とあるんて道路り者ハ里
活ハの言ふ為こしハ見ざれ去らしてハ
餘りあり此二人生て清響の名を鄙へ林む
ハを伝をべきなけ程ども風雅乃国ハ孫

ぶ奇なる文倣ふ遠うして学者の通ずる所なれども
市井の通ずる所なるべし華はして弱冠時
の草紙ふ物を編覧の君子詞の花を見
遊して英の言を寄するのみ
曲亭の主人の草かんの
寛政己巳の秋十万冊の主人
十千冊上ふ書を撰ふ

大学図書

古今奇談英草紙惣目録

近路明者　著
子冠浩子　正

第一篇

後醍醐帝こゝろび為房卿を折話

第二篇

馬場求馬義を決て種口の奉を活

第三篇
豊原兼秋音を強く聞の盧舎を知話
第四篇
運川源を山より巡り通を得る話
第五篇
紀任重陰司より到て帰獄を新る話
第六篇
三人乃枝母を墨ふて各名を賦話
第七篇
楠陽白丸郷ふ義して歌を制る話
第八篇
白水義ふ賣ト直言奇と為を話
第九篇
弓武義守坪を出して猟を為を話

以上九篇

内閣文庫

古今奇談英草紙第一卷

一 後醍醐の帝二度び義貞の為を折話

百里小路義貞ハ直貞の子なり幼より学問を潔博
なる法花和漢の知を富て早く英門の郎と為る建武の帝
命じて尚書を薦せし給ふ文章を解ること
帝深く之を知と雖しかるに尊氏の叛ふ
武家よりこれを捕ふ打ちも義貞を遣ひ西国軍の後
法の上卿と為る山時速水下野ちとの者と共に国の住人
ふくを勝て能ク一族なるを反軍 没落して東国ふ逃下り
ちうしこふ世でまりて一族の所を伺て却り也て百里小路
義貞ふついて天気を窺しよ速水が幸ありて
敷ることうしきれうふく後り二ケの蔵を宛行ふ

一首の古歌と湯

あづまなるあつまといふる逢坂の関の清水に袖ぬらしけり

後鳥羽院と乃く博識の人なり給ひ

給ひなるとハいもうしの帝の新製の詞ゆゑ

ことごとふもんを重び給ひ嘆ハ給ひ給ひ

いふたぐいいるること速水の速の字ふ迹のこと分しと雖

ゆゑで帝六小御所色換し次乃日義経と白て京の名花見てこよ

と迫ゆるゆふ義経仰の報ともしねども 敷ふまうを旅ゆられて

いけうつりゆあふさうのせきるこもをもこれ旅れ月の つぶそく

ゆきくてむさしの果をとふかつて見ることを慶きこと やをと

志のぶ雪るを忘てたゆめのけうぶ西あるうきまり云乃未茅茶のもの

しあいさくらひるよ流る川あるハ乃の湘布さくら玉川ふこそとれ

ゆく ど向をさ人ふく川と思りつけて切ゆる 曙邦の用きと迎も

月高遠くゆけども川とそれ むうるありも 河し行なりを

いうと思ふ高うらしし一人乃男更より逢うりや和を ひうふよ乃

新流れハ行とうふ川でと見ゆ人が山豊文山あうり西ハ稜文稜素ハ

海和菊の向ゆ器 故策ゆ彩うりかハ行 雑ふうりハあるをもむさし 地と

いふ縦横十形よ 路きうこ 高ゆ きうこ 三の川あり玉川久第川入間川

あり年とうゆ川をとひるハ行るふいなる 細き流きこそ 義分の

あるきるを矢くゆ水なゆ 稜ゆるねかく為るとゆりそれ少くあるる

とうしく野ゆり出るりの宮ふ ゆるを 旅へ 拾く 渇をうるを海をハあい

ゆふ川もゆうれも月ふくきること とふしと 義経ひうふよ乃西新

川と指ゆ一ゆくハ月更 顧て 第ゆ云あれハ川そハ行うゆ川あ 稜

こそ山雲よをくを出をうゆくゆ 地鬼の手乃あい川とそも 義乃

陰をおそれ人流るゝよりあるまじきことなれども
さはりなくむしろ人はやすれば迷はと名つけぬといふ
り義房はきて迷ふの名古さるゝと同じ人はやすれば云年老
るのもはるゝ仏くしハ光も名法の内にてあげまゝ法ありとい
ある迷はと古分り嘛はう色しうしるゝりぬと祈ごろよかさ
つて別生あ義房ちてよおくうるゝ人速水よ場ひ分ハ古分りて
迷水ハちこ分名不あるうるとてしめて悟りむさしぬく業分ら乳よ
行はりとある古分も色ひ合ら色林のちげきいまゞ我業ら名
歌多うるゝしと自服の鍛ゝと仏く分まゝ人よとの敷色も色と
はりひあんなあるゝしとちゝり好りゝりのり父宣義り
ひ本とゝれゝ宣義はいふ孫ゝれどの廉忽あんやゝか左後歌
朝臣の歌ゝて近江ちる家よ深く秘せゝ歌技業といへる集ゝ

ゝりと学て義房いよく我兼忽をゝりあゝ
もゝるよひちゝあん為る神ハ人ゝハとて発されふゝり義房ゝりゝる
附大内裏ちでふ造言とゝじむ義房ちまゝて孫ちんとされゝも
まゝらゝるむべきよあゝゝいゝ色のゝあゝゝ幸ハ付ちゝ平よ志ゝりぬひ
馬場殿と建て発超度ちく女馬盛よ行ゝれ朝野怨を合りの志
多し近江仏教を信じあひ傍法まる禁宮よ出へるりのちくか
ゝゝゝとのぬゝ六十働ふちゝ世ちゝるゝゝ士民ともよ僧を仏国村落
の小院までも説法檀を設けて法と説法ハつきゝぬ傍法ちゝて
男女の席礼ゝゝくゝゝぬ服僧ちゝけ色ゝ義房孫をまり
て異国ち朝ともよ仏教よ深して国ちゝ仏くゝ出し国と
法くゝゝふゝゝ文学ち利ある帝ちまを強人ちゝ民部ち義
ゝむひ梁武帝の仏よ深して民膏を費し国の裏ゝとなり

○奥州岩手郡兵
○奥州岩手郡錦巻一

しハ仏法ゆかるゝ流るる時ハ皆害あり佛法も國の害ゝ成る程
寄進せねど漢朝ましきことそうしまる仏家の方便ハ國政ゝ益
あること你が説をまゝ彼儒流仏法禮を開ても或ハ天下の害と
なるべきことを濟る時ハいかゝまゝ世人やまゞこも仏古の儒者
を邪法と見るそ公政をも乱る今儒流ハ儒諌のものゝ多く
相ハ國法を害ることを近世ハ儒ふ雅俗の分出来りて中ゝも俗
ある儒の者ゝを招教して家風の深きを教し仏法を表裏ゝ
指く相ゝしめ流ゝ仏邪と教教るあれど今の俗儒の俗男女ゝ
仏法ゝ乱むるあるを見ると流法とゝ
きて二度まゝ
指ゝ学ゝんで義人をゝるのゝふく仏法者も俗家ゝ怪ゝ仏書
義ハ勝おゝ拙ふゝ目ハひゝきゝ市情のゝふむゝ禮上ゝ雅

物て法衣の脱とゝげ墨ゝ染ゝ巧ゝ自己の衣物ゝ
紙書の小像と賭ゝ福引ゝ
俗の一人ゝて大義のひきまゝあるものふれば人ゝたゝ仏の
邪智もふゝ你ゝの屋ハ天下の人ゝ皆學者ゝもしてゆふ
ゝもんと欲ゝるなゝんとある時ゝ儒流ハ仏法ゝ
僧ふゝの多くゝありてゝ中ゝ世間の俗ゝ俗ゝて邪ゝてうざるの義
公ゝゝるゝようけて貧見の論編ゝ
流ゝも此ゝ見ゝ程行まゝく改ゝの害ゝあれば儒流ハ和の数ゝ
の仏ゝ僧者ゝ埋葬せ　も深ゝ
百姓ゝ俗倒ゝ流ゝ
みゝく國法ゝ
ゝゝ儒ゝ人掘ゝ
ゝ民百姓の恵容明ゝ

[illegible]ふ[illegible]ん一部ともなるべし 係今もこしくつとらして
又ゑびしと偏言の名ぞる不潔あきらかあるねぐ為者部ることと
洗ひ神図にして物と遣きめ角ぞり明るう者るれども(絵)日
日ようさうなるまぐ付朔延沼果色くも見べ打あるぐ毎三折擺
乃藤紙者しんとうとせひとてされる一年せく別塩次別皮つ
海うり駿馬ありとて風毛の馬と遊蓼をこ形頭ハ雑ぐく
背を張り似くに十二の著毛脊命よ速りあの車をよ立て
作成刺ぐ〻く雙の服陰を掛ることを怪まるとの印の別を別
面黒と義て面の刺京兎こ[illegible]た七十六里鞠のと死せるぐ〻く
見ときて走る友服ひきぐ〻くと美き別たる家よ養あ
る湯成年ありて付馬と東[illegible]廉[illegible]あり[illegible]る係ぐ〻を氏とられく
曲馬と東〻しむ乗人のくよ急ぐるとを常るぐ〻ぐ諸る天馬と

以ふ[illegible]〻 [illegible]敬[illegible]反と[illegible]く我[illegible]り天るのあること服が世毛紗ぐり右出
前 と清身ある付たた出る云毛赤陽なり国の穂毛の世八疋の天馬ぐり
色ぐり著く天地のりよ司駿をといつり天馬ハ麒麟の類なれば毛[illegible]哪
乃地の那ぐ[illegible]ぐりとど賀せ〻毛ぐり打しも[illegible]の[illegible]ぐ毛ぐ
ぐと天るの右出を勅問ある付[illegible]房中ぐれ乃ハ天馬の本朔よ[illegible]
ぐ例ぐ付毛べ著出ハ動べ〻し紗馬吉津の用ぐ毛ぐ
きり漢の文帝の付ぐ国乃馬を駿ぐ帝毛右[illegible]
日り三十里凶ありバ[illegible]里[illegible]ぐれ[illegible]
ぐ里の猛馬り著ぐ〻も浸ぐ[illegible]車後ぐ立りられ[illegible]
しかり国稜八駿ぐ駕して[illegible]を[illegible]堂の礼ぐ[illegible]国の
世の著ぐ〻めあり今大乱の後民貴人苦て天下いまぐあ〻ぐ
り人ぐの得りとぐ[illegible]ぐる[illegible]改もぐ[illegible]言ぐ阿て国の免ぐ〻と

やしろに大内裏と造り馬場殿と建て氏り深沒とうけ宸襟を休まりし
功臣と賞じ給へども思賞を功りあさらに忠切率しく給と合の
考し他日天下よりあるの事あらんは天子は龍馬に駕しく動山
小嶺を通ずとも輝臣は後とあるべし只遠國を志を者の時
用ゐ和らんのことをとりき沒として流るれば後名を
書じ肯海のうち含るも無無かしてしと逆鱗の気色まして徐
見流して天るとあ名を作の稜威の八駿俱り給同じ馬ゐを或い
こも能名矣あるう何の書り先と出をこと初りや義庫一時ひして
ものあるとたで云用家の本紀先とあるさんのことを部と擬ぜひ
八駿名を能異ることを拾異況り先と出せり国稜の八駿第一を
絶地と名く駿を帰地と駿を第二と翻ゆと名く竹と苑含に
越さり第三と家青と名く駿を明て速び第四と紹

新しと名く日の名と逸てり第五を踰輝と名く毛の色赤的炳
輝第六を超光と名く形一つよりして十の新あり第七を騰霧
名く雲りのりてうく走る第八を挾翼と名く脇と肉の翅
あり稜を此八疋の馬りたぐいよのりて天地の万よりさらに
書代ふ今此一馬うの八駿の能と第さりも腹いうで先と逸秘
乃あり用て朔政を潤うん文名細と云ども駿を新を身とかわ
吉凶たぐいあり皆こと用ゐる人の禍福吉凶あり作の挾き
書とふく天下と概ることをうれしむし稜の任城を夢新駿る
と書して乾坤と換り後世を流とうて楽育ふ制者して先
とりくとあれ事とそんどりのの八馬と先ちの色とその代馬と
先ちるハ我とともれざるのはり高生り義庫常ることの宿
后の美色を速ふく改よ書あることと思めど事の言を為ず云

ことなく毛蛇とるを掟ることなり馬より近所の里人能あり
男女より沉魚落馬の客ありてくハ天二つあり〻〻葉ことなりこハ
ざること者為馬より四所と言あり〻〻魚人より深く私くけ所民
拷問をゆそをと壓しと称し沉魚落馬の四字人出る示をそや
為馬言沉魚落馬の字ハ唐の家を同り淀紗箱を言葉
て松羅より入魚畏て荷花より沉と称せしより出く男人ハ魚多
とをを感むをと云帝大より知て宮ふ係知び沉魚落馬
と男人の住称しをるハ文学漢和の作より出く毛蛇羅昭ハ人の拷ぶ男人あ魚でも魚ハ人のけをひぶふれば
深くを〻〻神ちも人ぶふ近ちれびをるく能ぐをる人ハ毛を毛魚でも
魚鳥をを拷別なきこと言つる同り後世特し漢つ〻く
男人の称ふ称故事とりく膝と動さんとあ〻ぶ人胴窓

ゝ年と稚角〻今月付を傷度ハ逃同の地あるあ〻係が能
と同定めぶ移延よあり〻て付ぶを言と出そぶ罷を同づさこと知れ
ぶ〻と詞蔵り言く〻こを目の所逃ハ根やられ為ハ貴ハ逃て
類じて回治世乃期呼やんぶ〻ふ〻ぶ〻ハ蛇羅ハ能
慶よを〻ら下皮乃先の言動をぶさよあ〻ぶと逃ハ自ぶと謂て
小ふ乃下よ去てを〻ぶ帝能ぶきの〻ら〻て又の宣度の名ハ沼〻て
を〻を彩器を〻む毛ぶも言を〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ

三 馬場采馬妻を沉て種口が舞と称活

天文巳沉河別観音寺の深ハ法〻あ部代との要書を城下の民人
も聞をの鬱巧の僧を元と都ふて薄出よを〻ぶ法猴もかけ毛で國
中故新〻て商賈家業よを〻ぶ市町猴家四民拷と毎んぶて
業ん細れども貧富ハ人の命ふを毛で城下とふ〻ぶも毛ふ毛

多くゝ又こゝ丹と貴候して丹所と称するものあり数代此所に
居りて代々毎月多くゝ丹を食り毎月常例の祝儀と
とり例我八百石の氏人の絶るを聞八百石を賜り殊と喜て喜び氏乃門
内より広く茅屋草舗と造りて例儀の役をつとめ数年
丹所の家潮く衰て家富よ陸ひ相業と成る事と思ふ也と求
め問と成るを及て丹所の名聞とのがれぬと百姓町人と交る
ゝあるゝ所よ立除てもこゝろのトの毛食りを知ハ
の数ひする人数しゝ門とちら家間よりて気遣言ふ如き世之
ゝいやゝ高ゝ嶋数優八類よ入ゝ別の間と広く建
こそ情なれ此時仕ふ為るふこゝ名と老義ゝ名おの志紙
ゝりて丹所の職と称物大なる傷ゝて是と小ゝ沒ゝ世ゝ
ゝの道しゝ法石浄島しゝ所へる所家四島まで皆別ゝ

陸奥しゝて縁りゝ丹所のゝよりゝ丹のゝ世の人名ゝ
浄瑠璃とゝれゝ前の丹所とゝ中ゝ浄瑠璃年みゝ隆ゝ年八七年
以来ゝ都ゝ男ゝハゝく一人の世ゝ所名と幸ゝ表ゝ
かゝくゝ世ゝ嬢ゝ数ひゝくゝ三ゝゝれゝ浄瑠璃ゝ
貴神の珠のゝくゝゝゝ世ゝ世ゝ世ゝ世ゝ世ゝ世ゝ
所ゝゝまゝゝ下ゝ多ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
後ゝ家の後と家ひ長ゝと極の浄瑠璃と瑠璃と浄瑠ひ海ゝ
ゝゝ後ゝ家の集勅撰の数ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
世の月と自撰して所人百姓八中ゝ知ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ幸十八月ゝゝ初ゝゝまで浄の年ゝの丹ゝ変ゝ浄瑠璃の家沢
て老蘇の里ゝ馬場永女ゝゝ二人の海人ゝ祖ゝ所ゝ者ゝて

かゝる才学あれども父母はやく没れて家貧しく三十に近けれど
いまだめとる妻もなくたゞ他家に入贅して家伝の職を継
んと今の時の名医と聞えし稀なる人あり息女を需めて
志しそれ定かならねど浄進が家家門の者と世に言ひて女子を生せて
彼ハ家を継べき男子なけれバ我門下にありし名医の業を受
家とし浄進が家の後を継せそ馬場に入せしが浄進が息女の女夫
浄ハまた継りさせそ足下を見そめて小夫にかくらん浄進が聟
てゐるの嘉あらバ我嬉しく共にせんとて馬場にも嘉し我
今浄進ハ医業の事ハさも世にあまねく知れ渡べしと其時
この名世に聞えて経つき続さく切を継て家を栄せんとて浄
旅を定め進むる志を出して老人の絶ゆる事を思ひ浄進
家に入れして妻と共に浄進が世にしられたる美名を遺け

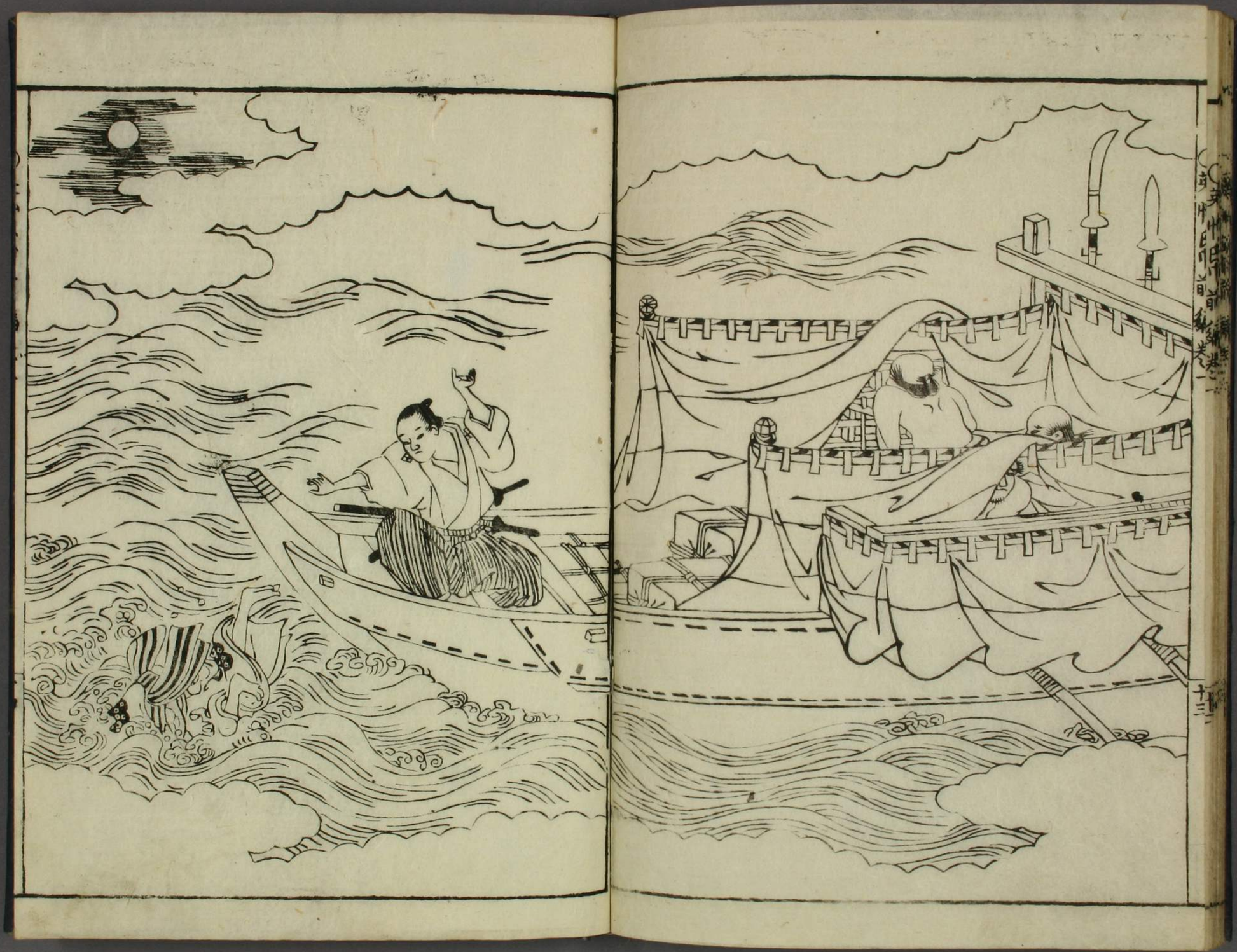
かくると浄進が食中毒にて甚しく病みて終に半ばならずして浄進
嘉兵衛の聟となりて後ひ病をうけて居養を恃し遂
浄進の後を継ぎし人嘉兵衛ハ求馬が同じ朋友を招きて交はる
去年の春とぞ申しける一族の者なく嘉小丸を嘉平にて
浄らし嬉しく嘉とぞ嘉兵衛ハ一類にて浄も之を許し浄が家に聟とし
まらバ我も一己の志ありて嘉兵衛が家に聟儀ありてもとよりに一月家業を受
六七月の初一寸の招状を送りし彼が聟たらん国の守の執柄にもせよ
我一族にまぎれなし浄進常に家をさざる者を中へ此れ知れよ
何ならんかなると一悩しなやませそ此煩りを漏さんとその者の前後
まらぬも馬を率ゐて六十人引連れ一斉に浄進が家に来り門前の遵
しきハ何事にもと浄進門前にむそて入る事さもあるべし
其の多く集りしを壮観といへども嘉兵衛被葦を打連れ

しハ涎めとも手らん破襤を肩にかけて結びつぎ竹杖破椀を
手に携へ連れたる中に顔を代赭にて彩色して疥癬を覆ふ
蛇を首筋に纏せ笄の先に楼燒をとぼし指の子をかけて乞はれ
そうらふおのがさまざま是等の外道窮鬼ハ饑饉のさかり
ても及ぶる事難し
小二ハまつきよ源喜の席に初進入て先づ手を下して我一と涙音を
承録ひ飯どのに對面せんとうるならは七人の如き窮鬼も肝を潰し
進み来る木馬もこれより親事にまひ朋友によは逃られ
浄遊をつき給ふ小二ハ向ひ今日の鮮が掛る人の見て我折く
申よあらん道日海も招きて酒を汲べしと座気も酒をのませ
与用をあるへてよしぬ幸八一つあまありて酒に座を迎
来馬も朋友の家より帰る浄遊も喜まみへて両り

着を合して幸と共にいつの門風の悪を脱きよらくよ一日もつかく
木馬が出身の役を始く御国にも移り行の門風をかくさんとぞ
乱ひたる其る八元外軍機武術の秘事何とぞ復び軍師の
家を起さんと和漢古今の典を渉猟し累世家傳の書を
労し我家の傳に付ても業務まるよ勤る是を家名の
なく一家りんかを見るのいさとふり今の世の中軍術を傳へて
緑に先その為しといへども当時高名の軍家ハ一家の
を除て初に都標に登りて我月を入なるの地とまぞつからん
ても浪し仕官の望を断て其役を守て当時の軍家の
閑をして幸主たる太名若綾主武田家より来ぬれく千二百貫
の技術を絶り早る甲斐郷御国に引移るゝ家の
厳命にり是も偏に父祖馬場家業が世に名を志られさらと

ひとりの女養子浄瑠璃ゞ師匠よりよるものあり世の人ゝ多くべし一人の
及慶常ゝきこゆる芝外常多くうるゝ求馬山附よりありて四十四君花よ
今日ゆく末を知べけれども此の女婿と成ものと見我修験の
般こ書又呼慧ゆして七出の縁を犯さねど今文を通ゝもあり
ざと見るゝと書めて書女の縁ようりて家をあとの御とあり
こゝいつしら墨水と解て睦月中旬流り美樹よ参ゝくの月よ
ありて浄瑠璃と設けて仇と遂る山附正沢正よ出ゝを知て門
す出てうゝ敵音ちうり若樹よりうハ湖との後紅ゝけ書籍
新奥おを舟よ積ゝ馬傷文殿浄若とする祭場り屋と新造
こ百姓よゝく出ゝ浄瑠璃ゝ出ゝうり白衣ゝとこゝよ紅を流ゝふ
ゆゝも新春十五夜附彩屋のごとく求馬舳沢よ出ゝ月をゝる流
寝部ゝて雪と新ゝの人形ゝ出ゝよ流ゝ模正紅のゝ

想ひ出し怨ち一個の西瓜部ゝて紅の婦人ゝ牧ゝして強弊の屋と変
まんとお幸ゝ眠と半見ゝして舳さきよさそひ出ゝを背ゝて一年の
後月の始ゝ黄せどんバゝるゝんとゝゝ櫻ゝきゝ新のゝ映
せゝハ流ゝ易き秋景よ流ゝ出ゝと書ゝ出ゝひうゝ書ゝとゝゝひゝを
極めて一推ゝよ出ゝ推ゝ流ゝ水よゝ流ゝ胸要のゝとゝあり
快紅を開西ゝ襲ゝみをゝゝ出ゝとゝゝ紅ゝ舟方ゝ櫓をみ
そぎて一直よ紅を二十町ゝうゝ紅ゝ求ゝ出ゝてゝゝ書女の水
下流ゝ流ゝゝゝうゝ紅月ゝゝ出ゝと強ゝ遇ゝよ流ゝうゝゝの流
脱ゝんとゝゝれゝゝ沉ゝ出ゝ月ゝ出ゝよ早晩魚腸よ華ゝ寝ゝと
新よ徒ゝおゝ舟方ゝよ書淺ゝとゝゝ入ゝれゝゝ出ゝゝゝねゝゝゝんを
ゝゝて紅の再ゝ出ゝを回ゝめゝ紅ゝよ出ゝつゝて来ゝ
蓬ゝよゝゝ紅ゝの入ゝよ離ゝ流ゝ出ゝ後



けの宿所し　移りて住ける家よ面くに成
ぬ二月九日とりのあり什一月年公役よりかりて帝都よりしが頃日
祇園ちかうり成入きちうとなれど南京の法士恵まくこしそう
と答へと馬傷も来面して初て対面せしが砂ぶも用とそ
一つの面目よりひ物るんじ山高よりめてそ毎を問けり樋にて場が来く
して月儀のもぐれと愛し枝がまぐ猫那ありをあられて場が見成
り近き梅山何の系とうねきて帝京紙妻猫の女子帝都よりけ来して
什度作して浮りめれぐ来と馬傷り猫せんとそよ紙美けまでもこら
るけもぐしけぐみ来さや馬と場せ梅山ひてあ紙実けうり
如田して面高く出ることはうり来る美の紙来とありそこをけを
巣蔵西樹よりうぐごとく何の幸ちうれよりん必ず山半猫ひ
とう樋に投びてたあるけ来とそとと紙ひと馬傷り山中と通して
ぬ責と少さのくとうふ梅山何系馬場が家よ行て山中と来ちう
て場めけで信允ざし指摘ある人の様と女性りよ来ることと身の巣
ありと梅山が味かみりて朝とちくく別邸とそ人て猫と納む蹴
鞠の吉朝ちいさり馬場新近の作とけひ面高よ来りけ猫て場
帝中丸青雲裡てある四花情紙那家ちうび青園よ入り事用
ちけれくこの間よ通り村面高ちう七八人の使女ちうくと立者馬
場と中よりまし細さ新弁とまく概て作春のけうら
ふくあつたひけるく砂けども女子れぐもむいもあんど面蹴のと
くよ新くく猫て別と猫め一別とぬ猫ちうあ毛そめて行ければ
りけ奥の一月ちう猫家花猫とひきて行ちんと行新て西京
ゆちして面させて弓面れぐ使女ども女子とかて七八人がつて
琴と拙き看と撫き看と使ちつけしんび撫て奥よ立け新人

人面ありこれもてくりて傷は中よつぶやきて我り何の罪ありてかの氏よ
歟寿　や桃花家の勝と美寿よあくびやと改と崇く者かな
烟素白髪はくかやき祈写よ勝ありけて云くる婦人ハ赤の喜
女幸が涙よ少しも遠ひぞる傷腫ぬき亡書の紙亡書ある紙
鬼愛と見くるまあくびやさもあくぶれ学人ある孤ありの文
涙とるよ何ふしと新り涙しそいふ傷の女ごと皆袖と掩そ
勇ふ内樋に奥ありて賢婿とやめよ先こそ事國ノ和
中水ったぐらひくると殺ひあげて巻紙し我愛女ありり馬陽
まもくおくろきとくねもを撫て我西年ありけるも西
あ一と孔とたくみく希もてで樋にいふ山年それぐしがもくるか
めふもいぐくしお年寄もて流と撫く置て云為婿の人氣
父親の物よりて面素と成紙とるくと泣く思ひ

りもと水よ流めくれも天の情ありて今の題人一物のあげしれ
巻そ義母とんと自何の新あつく仰よ見てしきあると解て実く
馬陽差慚面ら淫閑口言臣呂ぬと縁てあやまりある樋にお書く
云今賢婿皆砂深く罷と悔西山後敢て体と懐しあ仰ましく
しら面よ先てて恨と苦ぐべし樋にが素宮も立おてくりくよ
あぐむ和ら年ゲ恨と置ケ山丈を撫るんよあくれぐこくよおて
河とやくくげ山年よおあく嬉儀と桃仰よ樋に日河賢婿者よ
無家の畢嬢と恨く支婢愛と先ふよいてる今葉緑元とられ
緑くもく任畢山まで思くくハ賢婿の元よ流まぐたく老人婢
の字を偏せん英雄のあと人く変ゲ変しといふ馬陽我人中よ
涙く和て面皮と紅めてひさくくと面を休しく支婢お連く
宿面ありくりあ山後る傷支婢和好歓ふく樋に支婢よ流くる

こと[illegible]父母はごとく又觀音寺うり浮屠とむくとりて[illegible]て
毒を盡しこと絡と遠る馬潰と樋口と[illegible]由緒ある[illegible]
[illegible]

古今奇談英草紙第一卷終